

IAUD レビューミーティングの質問事項

(質問 1) 12 月 10 日にリオ国際会議で行なわれた IAUD セッションについてどう思いますか?

誰もが言っているように、セッションは大変素晴らしいものでした。会議の論文集に掲載されている論文もそうです。日本企業が、世界の中でもユニバーサルデザインで先行していることは間違いありません。我々は、IAUD が貴重な時間とリソースを割いて、重要なリーダーをリオに連れてきてくれたことに深く感謝しています。

出席者が総定員数を下回ったこと、参加予定者の急な予定変更でご不便をおかけしたことについて、残念に思っています。非常に限られた視点からしかユニバーサルデザインへの関心を持っていない参加者が多かったという問題もありました。都市計画者は都市で起きていることだけを知りたがっています。造園設計家は造園についての情報だけを欲しがっています。ハウジングデザイナーや建築関係者はハウジング情報だけを欲しがっています。交通関連の人々は交通の情報だけを欲しがっています。このように、非常に狭い範囲にしか興味を持たない関係者もいました。また、私たちはラテンアメリカとの文化の相違に対しても戸惑いました。彼らは形式にこだわらず、社交的で、話し好きなので、コンファレンス中セッションを出たり入ったりしていました。私はこれをどのようにコントロールすべきか戸惑い、こうした問題を事前に予期して管理する計画を立てなかったことについて反省しています。

1. (質問 2) UD スペシャリストの視点から、我々日本の UD 活動の長所と短所についてどのようにお考えですか?

日本人はユニバーサルデザインを社会の中に組み入れることについて、他のどの国よりも成功しています。私は、研究の進展とマーケティングの高度化を、敬意を持って(大変うらやましく思いつつ)見てきました。環境と UD の統合は傑出しています。また、多くの大企業が関わっているということは非常に重要だと思います。他国でこのようなコミットメントを得られた国はありません。企業がこれら UD(UD/エコ製品)を、世界に向けて販売することを期待しています。マーケティングは、国の特性やマーケットセグメントに合うように行われます。一方でアプローチのロジック及び社会的影響が世界の他の地域でも評価されるような、本質的な魅力を持っている製品もあります。企業のユニバーサルデザインへのコミットメントと、UD をとりまく他の領域との関係性を考えると、機会と挑戦がそこ

にあると私はおもいます。

2. (質問3) 米国、欧州で見られる UD 活動の傾向の方向性はどのようなものですか？

私の見解では、EU、少なくとも西ヨーロッパ諸国では、高齢化や障害といった従来から UD を広げてきた課題を通して、より社会に定着してきています。EU 委員会といくつかの国は、政策やインフラ整備計画、デザイン教育のカリキュラムで UD を浸透させるために投資をしてきました。Design-for-all ラベルの論議も続いており、ラベルの規格に関して合意が得られる日も近いでしょう。

米国では社会、そしてデザイン専門家の間では確実に、UD の概念が浸透してきました。多くの若いデザイナーや学生が関心を持っています。メディアも年を追うごとに関心を強めています。米国が、高齢化社会の到来や、7400 万人の 'ベビーブーム世代' の高齢化の現実に向かい合う必要があることを真剣に受け止めるのに時間がかかっていますが、関心は着実に強まっています。私たちの組織が重点を置いていることは、国際的な対話や協業をできるような仕組と、教育と研究開発の両方を提供できるボストンで、人間中心設計の施設を作ることです。家、仕事、学校、およびヘルスケアを研究する予定です。また、脳の働きを助け、高めるデザインの研究も私たちが関心を持つものの一つです。

3. (質問4) 2006 年に京都で開催されるコンファレンスに対する期待はどのようなものですか？

コンファレンスの計画に関する情報はまだ詳しく知りませんが、世界に向けてプロモートすることに協力を惜しみません。次の **Designing for the 21st Century** コンファレンスについてはまだ何も決定していませんが、京都コンファレンスとぶつからないように慎重に進めていきます。我々(AE)は 2006 年に国際会議を行なうことはないでしょう。

それでは、これらの答えがあなたの役に立つことを願っています。

敬具

米国 Adaptive Environments 常任理事、Valerie Fletcher

ご協力感謝いたします。